

これはこの本から抜粋しています。

1964——日本が最高に輝いた年
敗戦から奇跡の復興を遂げた日本を映し出す東京オリンピック

ロイ・トミザワ／著

来住道子／訳

「原爆っ子」とアメリカへのささやかな抵抗

一九六四年東京オリンピックの競泳男子四〇〇メートル個人メドレーで金メダルを獲得した一七歳のリチャード・「ディック」・ロスが、アメリカ競泳チームとともに初めて日本を訪れたのは一九六〇年、一三歳のときだった。当時は有名人のようにもてはやされたという。日本滞在中も終わりに近づいてきたころ、競泳チームと一緒に日光へ出かけた。そこは東京からほど近い、美しい観光地だった。ロスはチームメイトと森を散策していたが、そのときのことは今でも目に焼きついている。

旅行のときはよくやっていたことだが、僕はその日も一人で抜け出してぶらぶらしていた。宿に戻ろうと歩いていると、八〜一〇人くらいの子どもたちと出くわした。年はみんな僕と同年か少し年上くらいで、外見は傷跡のせいでひどく損なわれていた。彼らは長崎と広島で生まれた子どもたちだった。あとでトレーナーの一人に聞いた話では、彼らも観光客だった。引率の人たちは、こちらを避けるようにしていた。僕はショックだったし、ぞっとした。人間にこんなにひどいことができるのかと思うとね。たしかに、アメリカは戦争を早く終わらせるために原爆を落とした。でも、このときの気持ちは絶対に忘れられない。

それから四年後、再び東京にやってきたロスは、オリンピックの開会式で一人の聖火ランナーが国立競技場に入ってきたときのこともよく覚えている。「その聖火ランナーが競技場に入ってくると歓声が沸き上がって、厳かともいような雰囲気包まれた。これをどう表現したらいいのかわからないが。観客の視線は、この聖火ランナーに釘付けになっていた。場の雰囲気が一気に変わったのには驚かされた。その聖火ランナーは聖火台までたどり着くと正面を向いた。これも何とも言えないような瞬間だった。聖火ランナーはその場で聖火を高々と掲げた。僕はその姿に思わず目を見張った」

聖火ランナーの坂井義則は、一九四五年八月六日に広島で生まれた。原爆が投下されたその日に広島で生を受けた。坂井についてロスはこう語っている。「彼は階段の下までくると、立ち止まることなく軽い足取りで一気に駆け上がっていった。上までたどり着くと、ようやく立ち止まって、競技場の満員の観客や世界に向けて正面からその姿を見せた。そして聖火台のほうを向いて点火した。その瞬間、日本中に誇りや悲しみが入り混じった感情がどっと沸き上がってくるようだった」

日本にしてみれば、これは思い切った行為だった。第二次世界大戦のおぞましい記憶の数々を必死に拭い去ろうとする一方で、核攻撃を受けた最初で唯一の国であることを世界に再認識させる。オリンピック組織委員会は、そんなアメリカに歯向かうような危険を犯したのである。

親日家で『源氏物語』のような古典の翻訳者としても有名な、アメリカのエドワード・サイデンステッカーは、坂井が聖火最終ランナーに選ばれたのは、「偶然」ではなく、「アメリカへの当てつけ」だったと述べている。

開会式で坂井が聖火をともし場面をちょうど見ていた、国際オリンピック委員会のメンバーであるインドのG・D・ソンドイは、サイデンステッカーの反応について聞かれてこう答えている。「彼（坂井）は素晴らしいし、その雄姿を見られてうれしい。我々の務めは、若者をオリンピックに導くこと。年寄りにはただ黙ってそのサポートに徹するべきだ」ソンドイはさらに、坂井が聖火最終ランナーに選ばれたのは政治的な意味ではなく、日本にとっての「大きな希望」となる存在だからだと述べている。彼の姿は「これまでのオリンピックセレモニーの中で最も心打たれるものだった」という。

それでも、オリンピック組織委員会が日本の一世代の晴れの日、「原爆っ子」とマスコミに称された坂井を通じて広島にあえて注目を集め、アメリカに肘鉄を食らわせるとは驚きである。

